様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 06 月 05 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2011
課題番号：２２７２００６６
研究課題名（和文）　沖縄音楽の演奏における身体の役割

研究課題名（英文）　The role of the body in the performance and transmission of traditional music in Okinawa

研究代表者
ギラン　マット（GILLAN, Matthew）
国際基督教大学・教養学部・准教授
研究者番号：50468550

研究成果の概要（和文）：本研究では、沖縄の歌三線音楽や琉球箏曲の演奏時における、身体の動きの役割を調査し、旋律を作り出す役割のみならず、伝授過程における身体、または門下会のアイデンティティ表現としての身体、多様な視点から考察をした。演奏における身体の動きをビデオ映像として収録し、その映像の分析を行った。これらの映像について演奏者はどのように認識し、論じているのかを明らかにする目的で、演奏者とのインタビューを行った。また、身体の動きは沖縄音楽界では一般的にどのように見られているのかを明確にする目的で、出版された文献や楽譜を収集し分析した。

研究成果の概要（英文）：This research project examined the role of physical movements and gestures in the performance of Okinawan *uta-sanshin* and *koto* music. Movements were examined not only from the perspective of sound-production, but were also observed in the teaching process and as a way of imagining group identities. Physical movements were recorded as video footage, and this footage was analysed. In order to assess how performers understand and verbalize about physical movements, interviews with performers were carried out. Published musical treatises and notations were also examined to analyze the way in which physical movements are theorized in Okinawan music society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：身体、琉球音楽、流派、三線、kinesthetic、gesture、Okinawan music

１．研究開始当初の背景

世界の様々な音楽を演奏する際に、演奏者

の身体がどのような役割を持っているかは、近年の音楽学の大きなテーマとなっている。例えば、ジョン・ベイリーは 1977 年の論文で、アフガニスタンのドタールの演奏における「繰り返し習得された身体動作」‘certain overlearned patterns of movement’(1977:329)のことを motor structure（動作構造）と名付け、これらの動作は演奏される音楽に大きな影響を及ぼしていることを指摘した。同様に、藤田隆則（2002 年）は能管音楽の習得における「身体的な繰り返し」の重要さを強調している。また、10 年ほど前からは、演奏者同士だけでなく演奏者と視聴者の間の情報交換としての身体の「ジェスチャー」の研究も盛んになってきている。Clayton（2007 年）や Rahaim（2008）は北インドの古典声楽に伴う手などのジェスチャーを分析し、なかでも Rahaim は、旋律などの音楽的な様子はもちろん、また一つの系統が同じようなジェスチャーを使用することによって、その系統の存在はジェスチャーを通して認識されていることを指摘している。これらの研究では、音楽や音楽と関連する文化は「頭の中」で理解され、かつ再現されているだけではなく、身体の動きにも知識が存在し、また再現されていることから、「身体化された知識」と説明されている。本研究で、これらの研究を展開し、日本の伝統音楽の一つである琉球古典音楽における身体の動きや身体化された知識について考察する。沖縄県で伝承される琉球古典音楽の中心には、非常に緩やかなテンポで、間を長く取り演奏する曲が多数存在する。これらの曲は、その緩やかなテンポ、また精密な旋律の動きが理由で、暗記することは極めて困難で、さらには二人以上で演奏する場合、合奏することは難しい。この難しさを克服する手段として、手、首、頭、さらに上半身といった身体の動きを通じて、他の演奏者と音を合わせるという工夫がある。これらの動きと旋律については、新城亘（2006）が研究してきているが、本研究では、新城氏の研究をさらに展開し、沖縄の伝統的な理論や言い伝えをはじめ、現代の演奏者のビデオ映像や演奏者とのインタビューを通して、その身体の動きは「身体化された知識」としてどのような役割を持ち、身体の動きにどのような知識が表現されているのか考察する。

２．研究の目的

沖縄古典音楽の中心には、非常に緩やかなテンポで、間を長く取り演奏する曲が多数存在する。これらの曲は、その緩やかなテンポ、また精密な旋律の動きが理由で、暗記することは極めて困難で、さらには二人以上で演奏する場合、合奏することは難しい。この難しさを克服する手段として、手、首、頭、さらに上半身といった身体の動きを通じて、他の演奏者と音を合わせるという工夫がある。また、稽古において師匠がこれらの身体の動きについて具体的に指導し、指摘することは、教授過程での重要な要素の一つである。つまり、沖縄古典音楽の伝承過程では、旋律と同時に師匠の身体の動きを習得することが重要なのである。

沖縄古典音楽の楽譜である工工四は、18 世紀に作成されたが、当初は三線の旋律や歌詞のみの記載であった。20 世紀前半までは、歌の旋律や歌い方は記譜されておらず、同じ流派内であるにもかかわらず、違う歌い方が存在していた。しかし、旋律や歌い方が楽譜化される作業に合わせて、これらは流派内で統一の方向で認知されていった。また、20 世紀前半から、これらに加えて身体の動きも工工四に記譜する試みが見られる。例えば、世礼国男が 1935 年に製作した工工四には、身体の動きを記号化することや、演奏者の上半身の

姿勢を赤や黒で色分けをする試みが施されており、これらは、現在の工工四にも受け継がれている。

しかし、同研究者が 2000 年から稽古や発表会を通じて得た経験では、歌や三線の旋律は流派において工工四通りに統一されてきていることに反して、身体の動きは楽譜に掲載されているにもかかわらず、演奏する、若しくは継承する過程において意識的に無視されているケースが多々見られる。つまり統一性の方向にある歌い方や旋律と異なり、身体の動きは、流派内で唯一違いがある程度認められており、各門下会（や系統）で異なった形で伝授されているのである。また、発表会などの合奏する場では、流派内でもさらに同じ門下会（または系統）に所属している演奏者と一緒に演奏することを好む傾向が見られる。このことからも、身体の動きを伝授することは、門下のアイデンティティ形成の役割を果たしているのではないかと推測したことが、今回の研究の主な着想点である。

３．研究の方法

本研究は主に三つのアプローチをとった。①身体の動きはビデオ映像として収録し、その映像の分析を行った。2010 年７月と 2011 年１１月に行った沖縄でのフィールドワークでは、１０名ほどの演奏者の演奏を撮影した。これらの映像を Adobe Premiere のビデオ映像編集ソフトで編集した。さらに、市販されているビデオ、演奏者が保管している歴史的な映像などを購入し、これらのデータもデジタル化し同ソフトで編集した。②これらの映像について演奏者はどのように認識し、論じているのかを明らかにする目的で、演奏者とのインタビューを行った。録音したインタビューは３０時間ほど収録し、これらのインタビューを文字化した（一部）。③身体の動きは沖縄音楽界では一般的にどのように見られているのかを明確にする目的で、出版された文献や楽譜を収集し分析した。市販されている沖縄の楽譜である工工四（くんくんしー）には身体の動きが記されていることので、これらの楽譜と実際の演奏を比較することができた。

４．研究成果

本研究では琉球古典音楽における身体の動きの例を「身体化された知識」として考察した。一つの流派において、演奏者によって身体の動きはどのように異なるのか、を明確にする目的で、身体譜の作成を試みた。一つの例として琉球古典音楽でよく演奏されている《十七八節》の五線譜訳に、複数の演奏社の身体の動きが記された比較譜は図１で見られる。

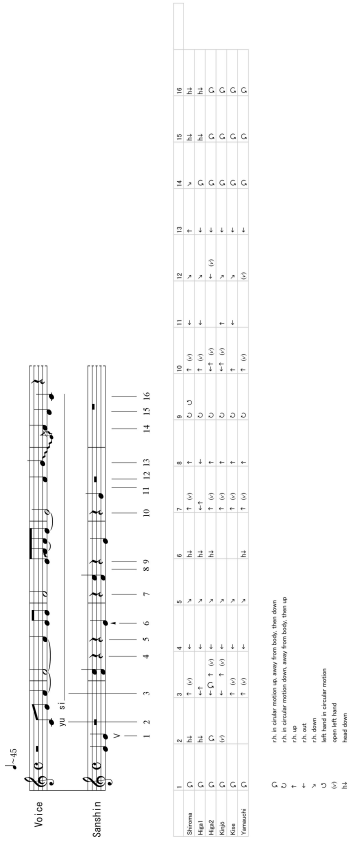

図１

図１から、演奏者は旋律やリズムにそって両手や頭を動かしていることが明確である。また演奏者によってこれらの動きが異なることも確認できる。

図１や他のビデオ映像で見られる身体の動きは、演奏の映像、インタビュー記録、稽古場での映像をもとに、次の役割を持っていることと解釈した。

①旋律やリズムの記憶：演奏者は意図的に身体を特定の「型」に基づいて動かし、インタビューでも「体でおぼえる」などの発言が数多く見られた。藤田氏が能管の演奏技法を習得する際の「身体的な繰り返し」と同様で、琉球古典音楽の理論で様式化されたことだと考えられる。

②伝授過程では身体の動きを通して旋律やリズムを伝える伝授法をビデオで確認できた。さらに、お稽古場での身体の動きは師匠が生徒に積極的に指摘していることを収録できたので、教授課程における身体の役割をより明確に確認できた。日本の伝統的な教授法として、楽譜の使用と対照する意味で、「口伝」(oral transmission) という用語がよく使用される。この「口伝」は文字通りでは「口で伝える」という意味であるが、実際の稽古上では様々な方法で情報が師匠から弟子に伝われていくと考えられる。本日は沖縄の歌三線に焦点をあてたが、これからは同じような「体伝」が日本の他のジャンルでの存在についても考察する意義があると考える。

③美的な役割：多くの演奏者はインタビューで身体の動きを美的な視点から評価した。つまり、沖縄の古典音楽の演奏では、音を作り出すことのみならず、身体の動きは演奏の重要な要素であることが明確になった。

④門下界のアイデンティティ：

身体の動きは旋律を暗記し、または他人に伝えるためではありながら、さらにもう一つの「知識」を表現していることを確認できた。つまり、「手の動きを見ることで流派内の門下会や系統がわかる」といった発言では、身体の動きは門下会のアイデンティティをも表現していることが明確になった。また、この調査では一つの門下会の中で手の動きを統一する意義についての意見が次々と表現されたことから、このことは現在の演奏者の間で意識され、また問題視されていることがわかった。

最後に、本研究を次のように展開する予定である。研究者が収録映像は論文では静止画像として掲載してあるが、これらのビデオデータをデータベース化し、ウェブ上または DVD として整理する予定である。成果発表の際に、本研究の対象であった沖縄の古典音楽における身体と、日本本土に伝承されるジャンルにおける身体の動きとの関連性についての指摘があったので、この点についてもっと考察する必要があることが明確になった。今後は、日本本土の能、声明を対象にした比較研究を行う予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

① Gillan, Matt. 2012. Theorizing the Okinawan body - Fieldwork on physical gestures in the performance of Okinawan classical music.
Humanities. Christianity and Culture 43, 109-128.

〔学会発表〕（計　２件）

① 2011/07/04. ‘Embodied Lineages - gesture and movement in the performance of Okinawan classical music’. International Council for Traditional Music conference, St. John’s, Canada.

②2010/10/14. ‘琉球古典音楽の「姿」

演奏の身体化と門下会意識’．東洋音楽学会大会、東京学芸大学。

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
ギラン　マット（GILLAN, Matthew）
国際基督教大学・教養学部・准教授
研究者番号：50468550

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし